

腐り切った組織の実態を継続してウォッチする 第六十六弾

神社本庁再生への道―その二十九
神社本庁田中執行部は陥落寸前に―評議員会は
北山議長のデータラメ議事運営で大紛糾

東京農業大学の初代学長で、イネ糊種の塩水選種法を考案した横井時敬氏は、様々な格言を残したことも有名な農学者であるが、そのひとつに、「農学

藤原登 (フリーライター)

栄えて農業滅ぶ」という言葉がある。近代農業の本質的問題を抉った言葉だが、社会の様々な事象が抱えている問題を考察する際には、いつもこの格言を対象とする事象に置き換えて考察してみることにしている。

五月二十五日、二十六日の二日間開催された神社本庁評議員会に出席した関係者の声を聴くと、この替え歌ならぬ替え格言が、真実の言葉として聞こえてくる。詳細は次号に譲るが、評議員会の概要を速報としてお伝えする。

一目的の本会議は、午後各種委員会が開催されたため、午前中で本会議は終了したが、恐らくこの展開を予想していた田中執行部は、事前に様々な対抗手段を講じていたようだ。その一つが、企業の総会屋対策に長けている日比谷パーク法律事務所所属の小川尚史弁護士を議場に近くへ待機させていたことだ。

実は、この日の午後開催された予算審議特別委員会において、法務関係の予算をめぐり、顧問弁護士の報酬等について質問があったが、小川弁護士は顧問契約ではなく委任契約であるとの答弁があったという。最近では法律改正で総会屋に対する規制が強化されてきたが、神社本庁の正常化を求める評議員をかつての総会屋と同列に見做すことは、評議員会を完全に冒瀆していることを意味する。

九時半から始まったが、この日も、前日の緊急動議の取扱いをめぐり白熱した応酬があった。神奈川県佐野評議員が、統理の指名に基づく執行部を求める緊急動議を改めて提案したところ、佐野評議員提案の動議を記した印刷物が配布されることになったが、これに対して休憩を挟んだ後、荒井総務部長が突然、佐野評議員の提案は、規程で定められた評議員会の権限には該当しないと難癖をつけてきた。小川弁護士の入れ知恵と推察されるが、ここでまた、会議は突然休憩となった。

長い休憩を経て会議は再開されたが、休憩時間中に佐野評議員を交えて動議内容に関する協議がなされた模様で、登壇した佐野評議員は、事務局の要望を受けて議案の内容を「統理が指名した芦原理事が早急に総長に就任することを求める件」という具体的内容に変更した上で、改革のためには人事の刷新が必要であると提案理由を説明した。これに対し、賛成、反対の意見が入り乱れたが、突然、宮崎県の伊藤俊郁評議員が、佐野評議員の動議に反対した上で、それなら、田中氏が正式な総長として就任することを求める提案も成り立つと発言したところ、今度は昼食休憩となった。

そして議場が騒然とする出来事が再開後に起きた。荒井総務部長が伊藤評議員の発言は緊急動議であるとして、「東京地裁

判決に基づいて田中総長が早期に、神社本庁総長に正式に選任されることを求める件」という内容の動議案の印刷物を準備し、評議員に配布、続いて賛成意見もないままに議長は、伊藤評議員に提案理由を発言する機会を与えたのだ。

誰かに操られているかのような議長采配により、いきなり佐野評議員の提案と真つ向から対立する動議案が出され、並行して同時に討論されるという異例の事態となった。すでに終了予定時間を大幅に超えており、約百五十人出席していた評議員は百八人となっていた。これで評決することは問題であるとの意見が田中派評議員から出たことを受けて、議長はいきなり二つの議題を取り扱わないと宣言し、発言要求をすべて無視して無理矢理次の議題に移ったのである。

天に唾する
田中執行部の終焉

企業の本会議と神社本庁の評議員会は、性格が全く異なる。佐野評議員の言う通り、神社本庁の目的が、高天原に事始まる神

祇祭祀の道統の護持にあるなら、神社本庁評議員会は、その目的を評議員各位が共有した上で、神社本庁の興隆を図るための討論をする場であってほしい。しかし現状は、少なくとも田中派評議員の関心は、田中体制の維持発展にのみ捧げられているようだ。

総長選任をめぐる裁判の控訴審判決は六月十四日に下されるが、最後に宗教法人法第八十五条を掲げておく。
「この法律のいかなる規定も、文部科学大臣、都道府県知事及び裁判所に対し、宗教団体における信仰、規律、慣習等宗教上の事項についていかなる形においても調停し、若しくは干渉する権限を与え、又は宗教上の役職員の任免その他の進退を勧告し、誘導し、若しくはこれに干渉する権限を与えらるるものと解釈してはならない。」

神社本庁総長は宗教法人の代表役員である以前に、宗教団体としての役職であり、その任免の権限は、最終的に神社本庁評議員会及び統理にある。次号では、控訴審判決を踏まえた上で、評議員会の議事内容を改めて振り返ることとしたい。

執行部傀儡議長の引き延ばし戦術

そして評議員会二日目が午前

昭和二八年、東京に生まれる。

昭和五二年、専門学校卒業後、広告代理店勤務の傍ら、独学で歴史、宗教、哲学を学ぶ。現在は同人誌を中心に寄稿している。

藤原 登 (ふじわらのぼる)

が、表現としては正確になるだ

利になることを承知している北

山秀彦議長は、動議として取り

上げようとせず、賛成意見を無

視して議事を進行したという。

として評議員会二日目が午前